

大学での学習をサポートする教育に関する一考察

—— 学習レディネスの欠如とサポート講座 ——

中村博幸

I. はじめに

大学生の学力低下や、学習意欲の低下についてが話題に上ることが多くなっている。⁽¹⁾

また全体的な学力や意欲の低下ばかりでなく、個々の学生間のバラツキも大きくなってきているのが現状であろう。ここでいう学力低下とは大学卒業生の学力低下、すなわち大学生の質の低下を意味していない。

(それは別途、論じられている。)つまり大学教育を受けるために必要な、レディネスとしての学力低下を意味している。一方入学時のリメディアル (Remedial) 教育もかなり多くなってきている。⁽²⁾⁽³⁾

しかし学力低下の内容と原因を明らかにしないで対症療法に走っても、教育効果はあがらない。そこで本稿では“学力低下”と言われることの内容を分析し原因を明らかにすると共に、学生が大学における学習をスタートするにあたって、何をどのようにそろえる (準備する) 必要があるのかを考える。

II. 大学教育を受けるためのレディネスの欠如

大学生の学力低下=大学教育受講レディネスの欠如には4種類が考えられる。

- ①大人社会のプロトコル^[注1]の欠如
- ②基礎学力の欠如
- ③専門を学ぶための基礎の欠如
- ④大学での学習のための基礎欠如

これらは内容はもちろん原因にも異なるところがあるにもかかわらず、同一に語られるところに混乱が生じている。

さらに大学の教育目的も大学審議会の答申⁽⁴⁾などに見られるようになりつつある。^[注2]

したがって、学生が学習のために必要とする学力も変化すると共に多様化してきている。そこでまず、レディネス欠如といわれる内容から明らかにし、大学教育とのかわりを述べる。

1. 大人社会のプロトコルの欠如

(市民・社会人としてのプロトコル)

(1) 欠如の内容

近頃の学生は常識・教養がないといわれる内容で、授業や学内で教員と学生が集団や個人で接触する時に生じる。具体的には以下のようなことがある。

①文章や言葉遣い

知人や目上の人など、他者との関係に応じた話し方ができない。順序だてた説明ができない。内容や目的に応じた文章が書けない。また文章そのものを書くのが苦手である。

②対人関係

アポイントの取り方や研究室での会話ができない、また電話の応対や手紙が書けない。さらに約束事に対してルーズである。

③教室における態度

私語はおろか、授業中に徘徊する、携帯電話をかけるなど、初等・中等教育で

の学級崩壊の現象の大学版ともいえることが起きつつある。

(2) 考察

これらのプロトコルは、欠如というより世代間や彼らの属する環境と大学とのプロトコルギャップに起因するものもある。したがって学力低下という言い方はふさわしくないかもしれない。しかし一部の大学・短大では、「世間に恥ずかしい。就職に差し支える」などの理由で、リメディアル教育のプログラムに含めている。

2. 基礎学力の欠如

(1) 欠如の内容

初等・中等教育の教育目標が達成できていないと考えられる学生がいる。これらの学生は大学の授業が円滑に受講できない。具体的には以下のようなことがある。

①学習に関すること

- ・計算力がない
“分数ができない…”はともかくとして、数理的な考え方が苦手であり、数式を敬遠する。
- ・長文が読めない、意味がとれない。また漢字を知らないなど国語力がない。
- ・興味を持つ教科以外の知識がない

②受講態度に関する事

- ・ノートの取り方がわからない
自分のノートをつくるのではなく、記録としてノートを取る。
- ・自分の意見が発表できない
人の意見に対して議論ができない
- ・長時間の教室学習ができない

(2) 考察

最近の大学生にこれらの事が生じてきた原因については後述するが、このような現象の出現は、大学・短大間でかなりの差があり、また個々の大学間でも差がみられる。すなわち、この様な現象を持つ者の進学する先の高校・大学が限定されるのか、または高校・大学が持つ固有の学習スタイルに生徒・学生が影響されるのかはともかく、

学校レベルによるトラッキングが行われている。⁽⁵⁾_(註3)

3. 専門を学ぶための基礎の欠如

(1) 欠如の内容

大学で専攻する専門教育を受けるために必要な高校教科が学習できていない。具体的には以下のようなことがある。

①専門基礎的な科目の学習

- ・物理－理学部・工学部
- ・化学－理学部・工学部・薬学部・家政学部・医学部
- ・生物－医学部・農学部
- ・数学－理学部・工学部・家政学部
- ・日本史－文学部（史学系）・社会学部
- ・世界史－文学部（史学系）（欧米文学系）・経済学部
- ・現代社会－社会学部・経済学部・法学部

②関連基礎的な科目の学習

- ・数学（統計分野）－文系の専攻でもかなり必要である
- ・英語－専門科目の洋書や論文の理解のために必要である。コミュニケーション目的の語学とは別の内容である。

(2) 考察

現在話題になっているのは、専門を学ぶために知識やスキルとなる科目が中心である。これは知識やスキルが具体的に専門の学習に影響を与えるからであろう。しかしその学問独自の発想や論理の展開など、根本的な意味での基礎の欠如を考える必要がある。またその科目の未履修と未習得は別の問題として考えるべきである。

4. 大学での学習のための基礎欠如

(1) 欠如の内容

大学生の数が増え、また一大学あたりの学生数が増えると、次第に以下のことが話題になってくる。

- ・論理的な文章の読み書きができない
(レポートが書けない)

- ・教養としての読書、新聞を読む習慣がない
- ・論理的に考える習慣がない
- ・考えを言語化できない
- ・知的好奇心がない
- ・大学型教養に対する関心、知識がない

(2) 考察

大学教育は、上に述べたような内容に関心・意欲を持ち、またレディネスを持つ者の上で成り立ってきた。したがってこれらの欠如は、大学教育の崩壊を意味し、根本的に大学教育の目的や方法を変えることが要求される。それを防ぐための対症療法として基礎演習、少人数教育といったきめの細かい、学生にとっては受動的とも言える教育方法が行われつつあるのではないだろうか。

III. 大学教育を受けるためのレディネス欠如の要因

1. レディネス欠如の種類別の要因

(1) 大人社会のプロトコルの欠如の要因

①社会のプロトコルの変化

どの時代も高齢者から“近頃の若い者は…”と言われるように、その社会のスタンダードな価値観は絶えず危機にさらされている。つまり価値観の変化に伴うプロトコルの変化に対して、世代間の感覚の違いから摩擦が生じるのである。

しかし一方では社会の急激な変化により旧価値体系そのものが陳腐化するなかで、旧来のプロトコルでは円滑に対応できない状況も生じている。それはたとえば国際化による異文化交流、情報化によるネットワーク社会、文明の発達による生活スタイルの変化などは新たな社会的プロトコルを必然的に生じさせている。したがって旧来のプロトコルが通用する社会（たとえば大学）では、新旧のプロトコルの衝突が起こる。

②プロトコル教育機能の低下

家庭や社会の教育機能の低下が言われ

るが、これには二つの要因が考えられる。

- ・社会や価値観の変化に対して、教育を行う前に、自己の自信喪失
- ・家族や社会の一員である若者に対する教育の義務の放棄—家庭・近隣社会の崩壊

(2) 基礎学力の欠如の要因

①学習内容に関する要因

- a. 学習指導要領の改訂によって知識やスキルが低下したのは、二つの要因が考えられる
 - ・各教科の内容が、知識・スキル中心から考えさせる学習に変化した
 - ・カリキュラム全体が課題解決学習中心になり、基礎教科の単位数が削減された

b. ゆとりの学習

学校週5日制の実施やゆとりの時間の設置など、基礎学力のための学習時間が減少した。

②進学率の上昇

進学率上昇による全体数の増加は、必然的に学力格差を生じる。高校進学率が100%に非常に近い値であり、非常に大きな学力格差（高校格差）があることは周知である。それでも大学進学率が低いのは、学力の上・中位者が大学に入学していたため、あまり大学生の学力格差は生じなかった。しかし大学進学率が50%に近づくと大学生の学力格差も大きくなっていく。

③教育力の低下

教師の多忙、学級崩壊など教育現場の混乱は学校の教育機能を低下させており、学習目標を達成できないまま学校を卒業させてしまうことにもつながる。

(3) 専門を学ぶための基礎欠如の要因

①未履修に関して

a. 高校側の要因

学習指導要領の改訂や総合科、単位制高校の新設など、生徒が自由に科目を選ぶことが実質的に可能である。さらに科

目選択の段階で進学する大学で学習する内容がイメージできないという進路選択の不十分さも要因のひとつである。

b. 大学側の要因

専門を学ぶために必要な基礎学力や必要な科目の履修についてのアナウンスが、高校や高校生に対して十分でない。

②未習得に関して

ここでは高校での学習履歴（内申書）上は該当科目の単位を修得しているが、学力が低水準の者を未習得として扱う。

a. 高校側の要因

“分数のできない高校生”は、すでに20年以上も前からあったが、大学全入時代になり、そのレベルの者が大学に進学できるようになった。

b. 大学側の要因

入試の多様化—AO入試や推薦入試—や入試科目の削減により、専門を学ぶための学力が確認できにくくなった。また確認できたとしても、すべて入学させざるを得ない状況もある。

(4) 大学での学習のための基礎欠如の要因

①社会全般の変化にかかわる要因

a. 能動型から受動型の社会へ

ゲーム世代に代表される疑似体験の実体験化は、一見能動的に見える受動的な環境をつくる。また飽食の時代は受動的でも生きられる（むしろその方が得である）社会をつくってきた。

b. 社会の平等化と平準化

平等社会では、価値観や生き方の平準化が起こる。その場合、多数派の考え方が主流となり、少数派である大学（知的好奇心、リベラルアーツ）の考えは消滅していく。

②学校教育にかかわる要因

受験勉強に代表される知識（暗記）偏重の教育では考える力が育成されない。それと共に一部の伝統校を中心に培われていた、「考える教育」（今も国立大学附属校には残されている）も、平等化と平

準化の中で消えていった。

③大学進学をする層の変化

大学進学率が低いうちは、大学へ進学する層は中流の価値観を持つ家庭や高校の出身者が中心である。⁽⁸⁾しかし大学の大衆化がすすむと、多様な教養や価値観を持つ家庭の出身者が入学してくる。

2. レディネス欠如の全般的な要因

レディネス欠如の要因について種類別に述べてきたが、ここで全般的な要因をまとめる。上に述べてきたレディネス欠如の要因は、社会の教育力の低下、大学への進学率のアップ、大学大衆化などが考えられる。しかし大学教育そのものの変化も考えられる。

以下のことはレディネスのない者を欠如者として捉えるだけでは解決できない問題である。

(1) 大学教育を受ける目的の変化

①大学（学部）教育目的の変化

大学審議会答申^(注1)は、学部では課題探求能力の育成を目標としており、高度な専門内容は大学院で行うと述べている。したがって「専門を学ぶための基礎」は欠如として捉えないで、学部教育の基礎とするべきであろう。

②大学進学目的の変化

大学入学者のほとんどが、研究・学問志向でなく、専門的な知識を学びたいという現在「大学での学習のための基礎」の根拠となる考え方も欠如とはいえないかもしれない。⁽⁹⁾

③大学の一般社会化

以前は、学生文化や思考スタイルなどは大学外の一般社会と一線を画していた。またそれが大学生のプライドであった。しかし今は、アルバイトや下宿先（ワンルームマンション）などを通して、大学生が一般社会化しそれに伴って大学も一般社会化しつつある。したがって「大人社会のプロトコル」や「基礎学力」を大

学だけの欠如と考えることにも無理があるといえる。

(2) 大学入学方法の変化

大学生が入学する以前の状態が多様化しており、それを無視してレディネスをそろえることには無理があり、無意味かもしれない。以下に多様な入学の状態を考察する。

①多様な入学試験の形態

内容については前述

②社会人入学の学生

高齢者を含めた社会人の入学は、たとえば大学既卒者であっても現在の入学直前の学習履歴がない場合がほとんどである。何十年前前に優秀な成績で高校（大学）を卒業していても、既に知識が陳腐化していたり忘れている。甚だしい場合は、学習スタイルさえ忘れている場合もあるであろう。しかし、この人達は社会経験においては優れており、場合によっては大学教員より経験豊富である。（専門のフィールドにおいても。）

③編入学の学生

短大・大学を問わず、編入学生が所属していた大学と専門的に連続性がある場合は少ない。その場合既修得単位は一括認定しても、学習内容のレディネスには問題が残る。また、短大からの編入生については大学設置基準の学習目標が異なるため、既習の2年間とは認めがたい場合があり、ゼミ・卒論など専門の学習に困難が生じている。

④多様な学習歴の入学者

諸外国からの留学生、帰国子女、専門学校卒業など多様な学習歴を持つ者に対し、入学前に大学教育を受けるための一律のレディネスを要求することは困難である。

IV. 大学教育を受けるためのレディネス欠如への対応

1. 対応の考え方と方法

いわゆるリメディアル教育として行うた

めの考え方と方法について考察する。

(1) 大人社会のプロトコルの欠如への対応

①考え方

前述のように欠如というよりもプロトコルギャップとして考えられる。摩擦を避けるためには、大学システムの原則では学生が譲歩すべきであろうが、マーケット的立場からみた現状では教員側が譲歩せざるを得ないであろう。しかし、学習の根本にかかわるプロトコルや、学外的な信用にかかわるプロトコルは譲歩できない。

②方法

スキルとしてならばファーストフード店の接客マニュアル的に学習させることが可能であろう。（従来の就職のための礼儀・作法の訓練がそれに近い。）しかし根本的には、旧来のプロトコルを是とするグループ（階層）を中心とした学習環境を作っていくしか方法がない。

(2) 基礎学力の欠如への対応

①考え方

大学進学率が低下するか、初等・中等教育の現状が改善されないと根本的に欠如は防止できない。しかし前者については、大学の大量化の現状からは考えられないし、後者についても形式的な卒業認定をなくすなどの要望はできるが、実現は難しいであろう。

②方法

a. 学生側からの改善

基礎学力不足については、初等・中等教育段階からの補習を行う。

・日本語表現法—読み書き・話し方

これを通じて授業受講の能力（ノートの取り方、授業を聞く習慣など）の育成をはかる。

・英語—中学3年から高校1年程度の基礎学力講座を開講する。

b. 教員側からの改善

中等教育の方法を念頭においた授業方法などにより授業の改善を行う（FD）。

また、担任をイメージする指導教官制度も必要であろう。しかし一方では自立した学生を束縛しないような配慮も必要である。

(3) 専門を学ぶための基礎の欠如への対応

①考え方

当面はこれがリメディアル教育の中心になると考えられる。未履修者については、受験生にその科目の必要性を熟知させること、推薦入学の合格者のうちの未履修者には入学前教育である程度カバーできると思われるが、他の未履修者と未習得者については、大学が方法を考えなければならない。

②方法

a. 対象者の決定

未履修者・未習得者を問わずレディネステストを行い、水準以下の者を対象とする。

b. 授業の展開

ア. 方法1－単位認定をする

水準以下の学力者および希望者に対し、〇〇入門の形で開講する。合格すれば卒業単位として認定する。

イ. 方法2－単位認定しない

一定期間後に再テストを行い通過者のみに専門科目の受講資格を与える。授業そのものは課外で開講（外部委託）し、受講の斡旋は行うが原則として自学自習する。

c. 授業の形態

方法1・2ともに、授業者は学習指導要領を理解し指導経験のある高校教師や予備校講師が適している。授業者と大学教員が当該科目のうち必要な単元を抽出してカリキュラムを作成する。方法1の場合は単位認定者は大学教員である。

（情報処理などの実技科目と同じ形態。）方法2の場合の受講料は受益者負担である。

(4) 大学での学習のための基礎欠如

①考え方

大学で学ぶために根本的に必要な意識については、対症療法的にリメディアル教育で対処すべきではない。むしろ前述のように学生（入学生）の多様化に伴って必然的に生じる課題と考えるべきである。したがって、大学の正規のカリキュラムの中で、高等教育の柱のひとつとして取り上げる必要がある。⁽¹⁰⁾

②方法

大学基礎教育の中の基礎演習の形で行う。I回生前期は、討論の方法、資料検索、プレゼンテーションの方法、レポートの書き方などラーニングスキルを中心に学習し、I回生後期は知的好奇心、レトリック、研究のデザインなどを、所属する専門に促して体験するミニ研究（シミュレーション）を行う。前期のラーニングスキルについては、将来は外部に委託した授業展開も考えられる。

2. 教育の主体

学習レディネスの欠如を教育する主体は大学か、中等教育かあるいは学生の自己責任かについて考察する。

(1) 大学主体

「大学での学習のための基礎」は、大学が主体であろうが、「大人社会のプロトコル」「基礎学力」については、大学内だけの問題ではなく主体は大学ではない。「専門を学ぶための基礎」は大学は立場としての主体であるが教育主体ではない。

(2) 中等教育主体

中等教育の役割は、大学入学や大学準備教育のためにあるわけではないが、一方では大学と密接な関係を持つ。そこでは中等教育の独自性と大学との接続性の両者が考えられなければならない。例えば各教科は受験対策化してはいけませんが、一方新学習指導要領で新設された「総合的な時間」は、大学審議会答申の「課題探求能力」と連続性がある。^(注2)

さらに高大接続を踏まえた相互乗り入れ

も必要である。私立大学において、系列高校との関係を柱にした、インターンシップ高校・大学版や高大の受講生交換や、講師（教師）の相互扶助などはすでにスタートしている。その中で「大学での学習のための基礎」を学ぶことは可能であろう。

（3）学生の自己責任中心

語学などのスキル技能的な内容は自己学習が可能であろうが、「専門を学ぶための基礎」は自学自習をさせることが困難であろう。「大学での学習のための基礎」は、家庭や出身高校の社会階層的な問題がかかわってくる。さらに「大人社会のプロトコル」「基礎学力」は、それが自学自習できる者には現在の欠如が生じていないというトートロジーに陥り、やはり自己学習は困難である。

（4）社会主体

「大人社会のプロトコル」「基礎学力」については、上記3者を含めた意味での社会全体が教育の責任を負うべきであろう。

3. 学習をサポートするための組織や機関

（1）個別の各大学における組織

①教務の担当に含める

「大学での学習のための基礎」は基礎演習として、「専門を学ぶための基礎」の一部も正式科目として、正規のカリキュラムに含め単位認定をする。その担当者は個々大学の実状に応じて決定される。

②補習としてサポート

「専門を学ぶための基礎」のうち、大学での単位認定ができない内容のもの、「基礎学力」については補習として行う。（具体的な方法については前述。）その担当部局は個々の大学により異なる。

③エクステンションセンター

就職のための資格取得を目的とした講座を就職部などが開講してきた。また大学の公開講座を拡張した形で、各種講習会が有料で行われてきた。これらが発展した形でエクステンションセンターを設

置する大学が多くなってきた。⁽¹¹⁾

「大人社会のプロトコル」については、エクステンションセンターで開講するのがふさわしい。ただし学生に受講の必要性を認識させることが課題である。（必要な学生ほど、必要性を感じない。）

（2）大学外の組織が行う

①外部の組織に委託する

大学外の組織に講師派遣やプログラム委託を行う。または組織内の講座に学生を紹介するなどが考えられる。

- a. 講師として、高校教師・予備校講師などを委嘱する。運営は大学側があたる。
- b. 専門学校に補習プログラム全体を委託し、大学内で開講する。運営はエクステンションセンターなどがあたる。
- c. 予備校や塾と提携して、学生に紹介する。受講料の割引や補助を行う。

②複数の大学で共同の組織をつくる

前述のaやbを実施するために複数の大学が協議会をつくって、講師の依頼やプログラムの外部委託を行う。開講場所は各大学持ち回りや講座をいくつかずつ分担して開講し、加盟各大学の全学生が受講可能にする。開講形態の制約上、地理的に近接した大学がグループになる。また開講は、補習の形態が中心であり、単位認定をする科目の場合は後述の大学コンソーシアムで行う方法がよいであろう。

③大学コンソーシアムの立場で行う

例えば「大学コンソーシアム京都」の形態であれば「大人社会のプロトコル」「基礎学力」「専門を学ぶための基礎」「大学での学習のための基礎」のすべてにわたって開講可能である。その場合、コンソーシアムが独自講座を開講、個々の大学単独の講座をサポート、その中間の数大学希望講座の開講の3形態が考えられる。

a. コンソーシアムの独自講座

これが講座開設の中心になると考えられるが、各大学の賛同や受講者数の確保を考えると「基礎学力講座」→「専門を学ぶための基礎講座」→「大学での学習のための基礎講座」、「大人社会のプロトコル講座」の順に開講するのが妥当であろう。

b. 数大学が希望する講座

コンソーシアムがコーディネートして講座を開講する。開講場所はコンソーシアムの施設と考えられる。これは「専門のための基礎講座」→「基礎学力講座」の順に開講するのが妥当であろう。

c. 個々の大学の単独講座のサポート

前述の「外部の組織に委託する」の組織にコンソーシアムが相当する場合、講師派遣やプログラムの開発を行う。

V. まとめ

本稿では大学教育を受けるためのレディネスの欠如と、それを補うためのプログラムについて内容別に考察を行った。

大学での学習のためのレディネスには4種類あり、その内容はもちろん要因も異なる。したがってその対処方法も異なるべきである。

ところで学習のためのレディネスを（大学側が）揃える＝教育するというのは、学生の側からみれば“揃えられる”といった受動的な立場とも取れる。しかしここで意味するのは、学生が学習のスタートにつくということであり、個々の学生が自分の学習に必要な“学力”を自分で選ぶ、そのためのサポートであるというガイダンス教育の視点である。

今後は、個々の学生が自分に必要な学習レディネスを選ぶための動機づけの方策の研究が必要となると考えられる。

注

〔注1〕プロトコル (Protocol)

条約などの原案の意味であったが、コンピュータ・情報通信の分野ではデータ通信の実行に必要な通信規約の事をプロトコルと言うようになった。それが転じて、広く規約一般に対してプロトコルの語を用いる。特に最近、社会学の分野では、社会的規範の意味でプロトコルが用いられる。例えば文化間のしぐさ（コード）の解釈の違いを”プロトコル・ギャップ”のような表現をする。本論では、社会のルール・しつけなどを大人社会のプロトコルとして表現する。

〔注2〕

「21世紀の大学像と今後の改革方策について」⁽⁴⁾ 第2章「大学の個性化をめざす改革方策」の中で、学部教育は教養教育の重視と共に、初等・中等教育との連続性を考慮した課題探求能力の育成を目的とし、専門性については学部では基礎的能力を培い、専門性の向上は大学院で行うことと述べている。

〔注3〕「学校間格差と学習スタイル」

学校間格差は偏差値の差だけでなく、学習目的、学習意欲、学習方法、学校文化などあらゆる面にあわられる。M・トロウ⁽⁶⁾による大学の分類は、エリート型大学・マス型大学・ユニバーサルアクセス型大学である。その3種類の各々の学習スタイルの差については、島田⁽⁷⁾がまとめている。

参考資料

- (1) 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄：『分数ができない大学生』東洋経済新報社 1999年
- (2) 荒井克弘・羽田貴史・佐藤広志他4名：「高校教育と大学教育の接続関係」日本教育社会学会第48回大会 1996年
- (3) 「大学“教育”改革の胎動—リメディアル教育に関する実態調査」Between 1999年5月号 進研アド発行
- (4) 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」大学審議会答申 1998年10月26日
- (5) 中村博幸・秋尾保子：「本学における学生研究(4)—階層文化と教育」京都文教短期大学研究紀要第29集 1990年
- (6) マーチン・トロウ著 天野郁夫・喜多村和之訳：『高学歴社会の大学』東京大学出版会 1976年
- (7) 島田博司：「情報化・消費社会時代の大学授業観—SLGEモデルの提案—」日本教育社会学会第50回大会 1998年

- (8) P. プルデュー、J-C. バスロン著 宮島
喬訳：『再生産』藤原書店 1991年
- (9) 石桁正士編：「高等教育機関におけるガイダ
ンス教育の展開」広島大学大学教育センター
(高等教育研究叢書30) 1995年
- (10) 中村博幸：「高等教育における基礎教育のあ
り方と必要性」人間・文化・心 京都文教大学
人間学部研究報告第1集 1998年
- (11) 中村博幸：「ガイダンス教育としての資格課
程セッションの設置」京都文教短期大学研究紀
要第37集 1998年

ABSTRACT

Consideration concerning education by which study at university is supported

— Lack of study readiness and support course —

Hiroyuki NAKAMURA

Some readiness is necessary so that the student may learn at the university.

It is lacked, and the voice called a decrease of student's scholastic attainments is heard here and there. However, when the content of scholastic attainments decrease is often examined, it has been understood that the following four exists.

- ① Lack of protocol of adult society
- ② Lack of basic scholastic attainments
- ③ Lack of base to learn specialty
- ④ Lack of base to study at university

The content of ① is to apply the common sense of the society, and the cause is a change in the outlook on value on the society, etc. Therefore, it does not solves do at a university alone.

It is time when ② does not meet scholastic attainments of the junior high school and the high school graduation, and the solution is supplementary lessons, and **Faculty Development**.

It is time when ③ is not to learn the biology thing by the Department of Medicine student in the high school. An external lecturer has supplementary lessons for the solution. The unit is recognized.

The content of ④ is lack as intellectual curiosity and reading, etc. The solution is to start a course as a basic education in the curriculum.

In addition, where supported to supplement scholastic attainments was considered. There are the teacher's starting a course in the university, and consigning to an external lecturer in the university, and consigning to the organization of the outside.

However, is it important to make the necessity of not inculcation in an independent university student but four scholastic attainments of either conscious.